

旧相模原市と旧津久井郡との境、相模原市緑区大島は都市型の街並みと豊かな自然を併せ持つエリアです。この地で農業を始めて12年の和泉大樹さんは、現在、約10ヘクタール（東京ドーム2.5個分）の農地で年間40品目以上の野菜を栽培。「大ちゃんの野菜」として、近隣スーパーや宅食業者に卸しています。異業種から転身した新規就農者である和泉さんは「相模原市新規就農者連絡会」の会長も務め、次世代につなげる活動もしています。また、市内の生産者や市場、卸売業者と協力し、給食で使われる地場産野菜を増やすモデル事業でも中心的な役割を果たしています。次々と攻めの姿勢でチャレンジし、農業に明るい未来を感じさせる和泉さんに話を聞きました。

■農家にも問われる経営センス

現在、和泉さんは約10ヘクタールの農地で年間40品目以上の野菜を従業員やパートを雇い総勢9人で栽培しています。栽培した野菜は大手スーパーなどに卸しているほか、宅食業者やECサイトにも力を入れ始めています。

また、地場野菜の学校給食への利用を働きかけてきたこれまでの活動が実り、相模原市と協定を締結。昨年度から学校給食向けにタマネギを納品するなど、次々と新たな供給先を開拓し、勢いに乗っています。

「農業は領域が広く、まだまだ可能性がたくさんある業種です。会社勤めがうまくいかないからと農家に転向する人も多くいますが、農家は生産だけではなく、どう売るか、経営的視点も必要ですね」と、元々住宅設備機器販売会社の経営者だった和泉さんの言葉には、実績と経験に基づいた説得力があります。

現在、広くなった農地でいかに効率よく良質な野菜を生産するか、DX（デジタルトランスフォーメーション）導入などを検討しながら追求しているところで

■地域のためにできることを

和泉さんが農家に転身したきっかけ

美味しい野菜を 食卓の当たり前前に

相模原大ちゃんの野菜

和泉大樹さん

は、ある人との出会いでした。その頃、メーカーからの卸値と売値の数字に苦悩する日々を送っていました。

「彼の出会いで『何かを生み出した』という気持ちが強くなり、今からできる『ものづくり』は何だろうと考えたときに『農業』だったんです。」

滋賀県の農家に家族とともに移り住み、3年間修業を重ねました。

「農業を始めるなら絶対に相模原と決



まりとして存在感を増しています。

「地域の農業を次世代へとつなぐためには『自分たちだけ良ければ』という考えではなく、地域全体を考えなければ持続できません」。実際、地域の耕作放棄地をすべて借り受けるようにしているとい

います。また、地元の畜産農家とも連携し、これまで産廃扱いだった家畜ふんを回収。「有機堆肥」として土作りに活用しています。

和泉さんがここまでの取り組みを重ねているのはすべて「美味しい野菜を地元食卓に、当たり前前に届けたい」という使命を果たすため。「6次産業化や相模原ならではの名産品の開発も手掛け、相模原を野菜の産地へしていきたいです」と、今後の抱負を力強い言葉で締めくくりました。